



長尾和宏の

まちいしゃ 町医者で 行こう!!

第132回

与論島の地域包括ケア ——在宅医療と総合診療の聖地に

「よろん在宅医療フォーラム」

3月19日に与論町が主催する「よろん在宅医療フォーラム」の特別講演を依頼された。初めて与論島を訪問したので、今回、その旅について書きたい。

与論島は奄美群島の最南端に位置し、沖縄県ではなく鹿児島県である。飛行機では那覇空港からも鹿児島空港からも日に1便しかない。だからもしイベントに参加するなら1泊ではなく2泊を見込んでおいた方がいい。車で走れば1時間たらずで一周できるくらいの小さな島だ。一番高い(標高約100m)高台にある与論城跡からは沖縄本島の北端や沖永良部島が肉眼で確認できる(写真1)。人口は約5000人で農業と観光が産業の主体だという。美しい海と穏やかな島民性が印象的だった。



写真1

昨年、コロナの集団感染で全国的に報道された「与論献奉」とは、16世紀から続く与論島への客人をもてなすための儀式的な飲酒方法である。主人から順に客人全員に対して一杯ずつ酒を献上し、口上を述べてから酒を飲み干して杯を返し、周囲の者は静かに拝聴することになっている。実際、居酒屋で食事していると別席にいた島人がやってきて「与論献奉」を求められた。人と人の距離を縮めるための与論島ならではのコミュニケーション法だと感じた。

パナウル診療所と古川先生

講演会の前に島で唯一の診療所であるパナウル診療所を見学した。パナは「花」、ウルは「サンゴ礁」を意味するという。昨年まで院長を務めていた古川誠二先生は、わが国のプライマリケア、総合診療、離島医療の第一人者で、僕が最も尊敬申し上げる医師である。大阪と徳之島の徳洲会病院を経て、27年前に与論島にパナウル診療所を開設された。ちなみに僕も27年前に開業したので、同じ時代を歩んできたことになる。たった一人で時間に関係なく島民を診療し、在宅医療や看取りに尽力されてこられた。その合間をぬって島内のランニングなどトレーニングもかかさず、強靱な体力を維持されていた。診療所は古川先生自らが設計された木造の広くて立派な建物だった。壁には古川先生が作られた歌の詩が掲げられていた。僕は特に3番が気に入った(写真2)。

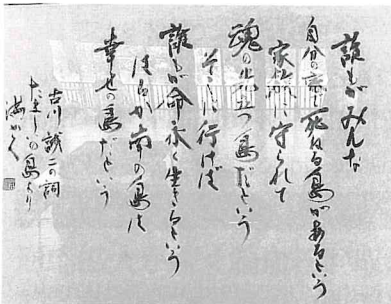


写真2

誰もがみんな自分の家で死ぬる島があるという
家族に守られて魂の先立つ島だという
そこに行けば誰もが命永く生きるとい
はるか南の島は幸せの島だという

診療所内には多目的ホールもあり、市民の健康教

室や文化教室として使われていた。隣接するご自宅のリビングルームから眺める景色も素晴らしかった。

古川先生との出会いは2019年に鹿児島市内で開催された「離島医療研究会」である。その時のテーマは「離島の小児医療」だったが、それぞれの離島で奮闘されるプライマリケア医たちのご講演はととても刺激的だった。懇親会ではドラマ「Dr.コトー診療所」のモデルとして有名な瀬戸上健二郎先生ともお話ができて感激した。離島で高度な外科手術も一人でこなすような医師は、今後の日本では二度と出ない。離島医療には内科や小児科や外科などの専門科はない。そこにあるのは「命を守る医療」だけ。医療の原形が離島医療にある。昨年秋、古川先生には僕のクリニックを訪問して頂いた。僕より9歳年上だけど、活き活きされていた。

「地域包括ケア」の最少モデル

「よろん在宅医療フォーラム」は山元宗町長のご挨拶から始まった。古川先生、私、関東で在宅医療を中心に活躍されている佐々木淳先生(医療法人社団悠翔会理事長)の順で講演をした後、与論徳洲会病院の高杉香志也先生、介護老人保健施設の和田峰光先生らもそれぞれの立場から与論島の医療について話された。その様子は島民だけでなく全国にWEB配信された。その後、5月からパナウル診療所長に就任予定の小林真介先生らも加わりパネルディスカッションが行われ、盛会に終わった。

与論島には病院、診療所、歯科医院、老健、特養がそれぞれ一施設ずつあり、今夏には訪問看護ステーションが開設されるという。診療所は在宅医療を含むプライマリケアを、病院は入院機能を担う。病診連携や医療と介護の連携はまさに「顔の見える連携」そのものだ。国が進める「地域包括ケアシステム」の最小モデルのように映った。こうしたシステムの構築を役場の末永真由美氏が裏方として支えていた。彼女は長年鹿児島県の離島医療に尽力されてきた凄腕看護師である。今回のコロナ禍においてはコテージに隔離した患者さんの病状観察においても活躍された。

高度医療が必要な患者はドクターヘリなどで島外搬送するので医師のトリアージ能力が鍵を握る。与論島における在宅看取り率が40%と高い理由は、島人の死生観と古川先生という稀有な総合診療医の存在

が重なった結果なのだろう。病院に入院していても死期が近いとわかったら慌てて自宅に連れて帰って看取りをするという。どこか台湾の死生観と似ている。

プライマリケア教育にも尽力

筆者は、学生時代、長野県下伊那郡にある無医村での活動に多くの時間を費やした。離島医療や東南アジアの医療にも興味があったが、お金がなくて叶わなかった。現在、都会で長年忙しく町医者をやっているが老いたら南の島の小さな診療所でゆっくり診療してみたい、という漠然とした夢がある。しかし、パナウル診療所は想像以上に大きく立派な建物で想像とかけ離れていた。島内唯一の診療所として、また最期まで家で診てくれる診療所として島民から絶大な信頼を得ていたことを強く感じた。そんな古川先生(写真3右)への尊敬の念がさらに強くなった。



写真3

古川先生は諸事情で昨年診療所を閉院された。1年間の空白ができたが、佐々木淳先生が率いる悠翔会が引き継ぐ。その門下生である小林真介先生が5月から診療所を再開されるという。小林先生は学生時代にパナウル診療所で離島医療の研修をして、古川先生のご自宅に泊まりこんでいたのが継承のご縁だそう。古川先生は27年間に鹿児島大学などのたくさんの医学生の実習を受け入れるなど、プライマリケア教育にも多大な尽力をされてきた。その弟子たちが今、離島やへき地で活躍している。

僕は、毎年与論島で地域包括ケアフォーラムを開催して欲しいと思った。もちろん美しい海でのリフレッシュも兼ねてである。与論島が在宅医療や総合診療の聖地になる夢を見ながら鹿児島経由で帰阪して、尼崎の在宅を回った。

なお かずひろ：1984年東京医大卒。95年、尼崎市に複数医師による年中無休の外来・在宅ミックス型診療所「長尾クリニック」を開業。近著に「ひとりも、死なせへん〜コロナ禍と闘う尼崎の町医者、551日の壮絶日記」(ブクマン社)

24 特集

にきび治療——治療法と治療薬

黒川一郎 ほか

01 キーフレーズで読み解く 外来診断学

手のふやけを主訴に受診した47歳女性
生坂政臣 ほか

06 Dr.ヒロの学び直し！心電図塾

洞徐脈/Sinus bradycardia
杉山裕章

10 プライマリ・ケアの理論と実践

【リハ×プライマリ・ケア】杖・歩行器・車いすの基礎知識
大野洋平

14 まとめてみました 最近気になること

本格普及なるか、オンライン診療【最新TOPIC】

18 追悼

追悼 高久史磨先生
矢崎義雄/横倉義武/門田守人/浦部晶夫/永井良三/千葉 滋

58 長尾和宏の町医者で行こう！

与論島の地域包括ケア——在宅医療と総合診療の聖地に
長尾和宏

03 プラタナス

08 難渋症例から学ぶ診療のエッセンス

16 感染症発生动向調査

43 私の治療

54 プロからプロへ

69 J-CLEAR 通信

72 学会・研究会・セミナー情報

74 ドクター求 NAVI

77 ドクター掲示板

60 医療界を読み解く【識者の眼】

松村真司 『かかりつけ医機能』の維持・向上

小倉和也 コロナ禍の自殺増

小豆畑丈夫 コロナ前に戻れるのか？(中編)

和田耕治 マスクを外せないのか？

島田和幸 コミュニケーション学のすすめ

薬師寺泰匡 コミュニケーションエラー

岡江晃児 ソーシャルワーカーの教育

宮坂信之 細胞の内と外の違い

横山彰仁 ウェルビーイングを考える